

メカジキの漁具漁法開発試験

沖縄県主任水産業専門技術員

金城 宏

1. 要約

メカジキの技術改良試験は重点課題として平成7年～9年度事業に掲げている、糸満漁協活性化事業計画の一環である漁具漁法開発構想と共同課題として資金面の協力を得てソデイカの術術改良試験を実施した。調査は糸満漁協所属の9.9トン漁船を用船した。漁場は沖縄本島南部海域の水深2,000～3,000mでソデイカ延縄式を応用した漁法で釣針部を水深400mに投下し2日間操業を実施したが、海上は時化で漁労作業は容易でなく幹縄の切断等でメカジキの出現は見られずエチオピア3尾の漁獲であった。

2. 目的

平成2年に本県で開発されたソデイカ漁業の平成7年度生産は2,300トン、19億円の産業となっている。しかし、その資源も乱獲傾向にある。メカジキはソデイカ漁業で時々混獲されることから漁業者の関心が強い、ソデイカ漁業の禁漁期間の「つなぎ」として、メカジキ釣りに適した漁具漁法開発試験を実施し、メカジキ資源の有効利用とソデイカ漁業のつなぎ漁業としての定着を図る。

3. 材料及び方法

漁具漁法はソデイカ延縄式を応用した。浮標縄は400m、その下に4キロの重りを付け1鉢の枝縄は6本付けとした。枝縄間は150m（1鉢の長さ1,050m）、餌はムロアジを使い、釣針の上部に水中ライトを付けた、鉢数は20鉢を使用した（全長21,000m）。

4. 結果

11月15日、海況は大陸高気圧の張り出しで南部海域は時化模様となりパヤオ漁場への出漁漁船は見られず、出漁を見直すかと迷ったが、明日からは天候はよくなるのではないかと判断し、午後4時20分糸満漁港を出港し南海域に向かう。

11月16日、北緯25度30分・東経127度51分の海域で午前5時に投縄開始、午前7時20分投縄終了、朝食後仮眠し、12時より揚げ縄開始、表面水温26.3℃台であった。船は縦横に揺れ、波をかぶりながらの操業のなか途中で幹縄が切断し、標旗を見つけるのに時間を要した。午後8時35分に揚縄終了、漁獲はエチオピア3尾であった。

11月17日、昨日の海域から10マイル北上した北緯25度40分・東経127度30分のパヤオ漁場の南側で午前5時30分に投縄開始、風波やや弱まったものの無理しながらの操業で午後7時35分に揚縄終了、メカジキの出現は見られなかった。このような時化模様での操業は無理と判断しパヤオ漁場に向け北上する。11月18日、パヤオ漁場でマグロの流し釣り漁業を行い午後に寄港した。

5. 考察

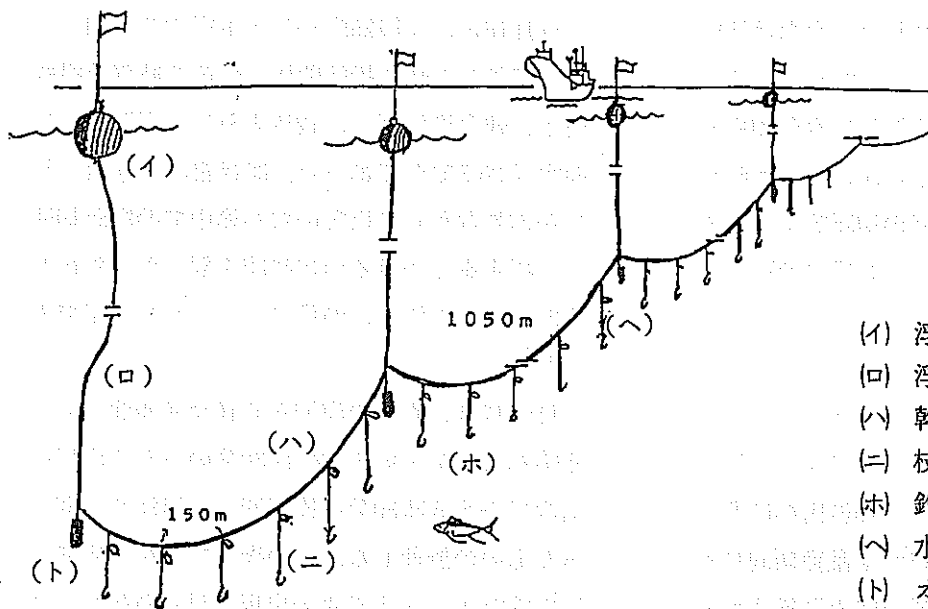
今回のメカジキの技術改良試験は時化で厳しい操業であったので成果は得られなかった。本県ではメカジキは主にマグロ延縄の混獲魚として水揚げされるが、我が国周辺海域では年間約1万トン、その内本県では約180トン水揚げがある。メカジキは体重300kgにもなり、全世界の温帯部～熱帯部に分布し、我が国周辺では冷

温帯水域の三陸近海に多い、夜間に表層、昼間に深層（600 m付近）へ日周垂直移動を行う。本県でのメカジキ釣りは昔からフカキと称し夜間に行うトビイカ漁業のかたわら生きたイカをかけた流し釣りで水揚げしている。近年、ソデイカ漁業の普及に伴い、着業船では時々メカジキを混獲しているが、キジ針にヒレがかかるとか、或いは枝縄に巻き付いての捕獲である。糸満漁協でのメカジキ水揚げは年3～4トンで体重は平均30kg前後である。久米島では3人の漁業者がソデイカ漁業と併用してメカジキを対象

とした漁業を行い、4ヶ月で17尾水揚げされ体重は平均50～60kgである。

このことから本県周辺海域におけるメカジキの資源は解明されず未開発部分が残されていると推察する。その可能性を探るため、今回の操業では水深400 m層に漁具を投下したが、500～600 m層で実施する必要がある。このため普及事業で実施することは予算的に無理があるので、水産試験場で漁業の可能性について解明してもらうため、平成10年度試験研究機関に対する試験研究課題として要望する。

漁具漁法図



- (イ) 浮標
- (ロ) 浮標縄 (400 m)
- (イ) 幹縄 (1針1050 m、20針)
- (ニ) 枝縄 (20 m)
- (ホ) 釣針
- (〜) 水中ライト
- (ト) オモリ (4kg)

操業位置図

